

2014.3.16 「幼子の祝福」 マルコによる福音書10:13～16

今日は「幼な子の祝福」というテーマでイエス様の子どもへの思いについて学びます。

キリスト教会では古くから子どもの信仰についても深い関心をもって、子どものための特別な礼拝や行事を行って来ております。それは1856年に北アメリカ・マサチューセッツ州チェルシーの第一ユニバーサリスト教会のC. H. レオナード牧師が6月第二日曜日に子どものための特別な行事を開催したことから始まったようです。その目的は次の二つです。(1) 子どもでもバプテスマを受けてクリスチャン生活が出来ることを強調し、その自覚をもたせること。(2) 子どもの信仰的自立が出来るように両親が子どもを神にささげる信仰を持つことが出来るように。

日本の国では法律によって5月5日を「こどもの日」と定めています。子どもの幸福のために国民の理解を深め子どもを立派に育てるという主旨のもとにいろいろな行事が行われています。

マルコ福音書10章13節以降に目を注いでみると、母親たちがイエス様のところに子どもを連れて来て祝福を受けさせたいと願ったのも子どもの将来を思う親心からでした。ところが思いがけなくも弟子たちはそれをたしなめてしまいました。どうしたのでしょうか。理由はいろいろ推察するしかありません。子どものくせに・・・とか、先生はとても忙しいのだから・・・と、現代の大人の中にもその様な考え方はあると思います。その頃イエスは確かに十字架への途上の身でありましたが純真な幼な子の心を大切に子どもたちを抱きかかえて神の国の真実を語られたのです。

イエス様が幼な子と神の国とを結ばれたのは、(1) 幼な子の従順な心 (2) 幼な子の信頼する心 (3) 幼な子の謙遜な心 (4) 幼な子の悪意を持ち続けない心です。昔から「三つ子の魂百まで」という言葉があります。幼な子の時代の人間教育、しつけが如何に大切なことか親として大人として私たちはしっかりと心にとめなければなりません。(城間)